

## 対人ストレス尺度の開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00000492">https://doi.org/10.14945/00000492</a>

# 対人ストレッサー尺度の開発\*1

橋 本 剛

## 問題と目的

対人関係が個人の心身の健康や適応に対して好ましい影響を及ぼしうることは、ソーシャル・サポート研究において、これまで少なからず指摘されてきた (e.g., Barrera, 1986; Cobb, 1976; Cohen, 1988; Cohen & Wills, 1985; House, Landis, & Umberson, 1988)。その一方で、対人関係が個人の健康や適応に悪影響を及ぼしうる可能性についても、対人葛藤、攻撃性、対人不安など、さまざまな研究テーマのもとに、数多くの知見が蓄積されている。しかし、それらは問題を特定しているがゆえに、個々の問題についての詳細な議論や理解には適しているが、「対人関係が心身の影響に及ぼす好影響」の総称的概念である「ソーシャル・サポート」のように「対人関係が心身の健康に及ぼす悪影響」の包括的な議論や検討には不適切であることも否めない。そこで橋本 (2003) は、そのような否定的対人関係の総称的概念として、「対人ストレス (interpersonal stress)」という語を提唱している。これは最広義には「対人関係に起因するストレス」、実質的には「ストレッサーとなりうる対人的相互作用、およびそれによって生じるストレス」と定義されるものであり、ソーシャル・サポートを「心身の健康に好影響を及ぼす対人関係の包括的概念」と見なした際の、対概念として位置づけられるものである。

対人ストレスの重要性は、心理社会的ストレスとソーシャル・サポートという2つの研究領域における先行研究の知見から示唆されている。まず、対人ストレスが心理社会的ストレスのなかでもかなり重要な問題であることは、心理社会的ストレス研究におけるストレッサー尺度に、対人関係にまつわる項目が少なからず含まれていることから伺える (e.g., Dohrenwend, Krasnoff, As-

---

\*1 本研究は、平成16年度静岡大学人文学部若手研究者奨励費の支援を受けている。

kenasy, & Dohrenwend, 1978; Holmes & Rahe, 1967; Kanner, Coyne, Schaefer, & Lazarus, 1981; Sarason, Johnson, & Siegal, 1978)。また、対人ストレッサーはその他のストレッサーよりも、より強いネガティブな影響力を有しており (e.g., Bolger, DeLongis, Kessler, & Schilling, 1989; 高比良, 1998)、さまざまな精神病理 (統合失調症、抑うつ、孤独感、アルコール依存、摂食障害など) についても、対人関係 (特に家族関係) がそのあり方を大きく左右することが指摘されている (Hooley & Hiller, 2001; Segrin, 1998; 2001)。そして、このような対人ストレスの影響力の強さの背景には、(その他のストレッサーと異なる) 対人ストレスの独自性—自己概念や自尊心との強い結びつき、ストレスを生じさせている相手も能動的存在であることによる対処の難しさ、対人関係そのものの生活における重要性など—があると思われる (Rook, 1992)。これらの知見は、対人ストレスが、単に心理社会的ストレスの下位概念のひとつに留まらない独自性を有するものであることを示唆している。

一方、ソーシャル・サポート研究においては、対人関係が心身の健康に対して肯定的機能を持つというサポート本来の働きに加えて、ときには有害な機能を持ちうることも少なからず指摘されてきた (e.g., Coyne & DeLongis, 1986; House et al., 1988; Rook & Pietromonaco, 1987)。そして、対人関係の肯定的機能 (いわゆるサポート) と否定的機能 (いわゆる対人ストレス) の相対的影響力を比較した研究においては、対人ストレスの影響力が、サポートを凌駕することを示している知見の方が多い (e.g., Fiore, Becker, & Coppel, 1983; 橋本, 1997a; Horwitz, Mclaughlin, & White, 1997; Lakey, Tardiff, & Drew, 1994; Rook, 1984; Schuster, Kessler, & Aseltine, 1990; Vinokur & van Ryn, 1993)。これらの知見もまた、個人の健康や適応を議論する上での、対人ストレスの重要性を示唆している。

しかし、対人ストレスの重要性を間接的に示唆する知見は数多くあるものの、対人ストレスを直接的に扱っている研究は少ない。その理由としては、対人ストレスという概念自体の曖昧さや、個々の研究者が恣意的に対人ストレス (もしくはそれに類する概念) を扱ってきたことによるところが大きいと思われる (橋本, 2003)。そのことは同時に、対人ストレスをとらえるためのツール、すなわち尺度についても、妥当性や普遍性の吟味が不十分な尺度を、恣意的に設定・使用してきたことを意味している。そして、対人ストレス研究のさらなる進展のためには、より包括的な議論を可能とするような、かつ信頼性と妥当性を備えた尺度の作成が不可欠であろう。そこで本研究では、そのような意図を

実現しうるような、対人ストレスを測定するための新しい尺度を開発することを目的とする。ちなみに本研究では、対人ストレスという概念の中核はストレッサーにあるという見解（橋本，2003）に則り、厳密には「対人ストレッサー尺度」の開発を目的とすることとなる。

本研究の尺度作成においては、先行研究における対人ストレス測定法の問題点を考慮しつつ、以下の点に留意した。すなわち、本研究で開発される尺度は、以下のような特徴を有することを目指して作成された。

まず第1に考慮すべき点は、対人ストレッサーのレベルに関する問題である。たとえば、対人ストレッサーのなかには、ライフイベント水準のものもあれば、デイリー・ハッスルズ水準のものもある。そして本研究では、デイリー・ハッスルズの影響力はライフイベントに優るとも劣らない（Kanner et al., 1981）という指摘に基づいて、多くの人が日常的に経験しうる対人ストレス、すなわちデイリー・ハッスルズとしての対人ストレス尺度を作成することとする。

第2の留意点は、対人ストレッサーとして評定する側面に関する問題である。ソーシャル・サポートの測定法には、構造的側面からのサポート測定（ネットワークのサイズ、密度など）と、機能的側面からのサポート評定（知覚／実行されたサポートの頻度や有効性など）がある。対人ストレッサーについてもこれと同様に、構造的側面からの測定と機能的側面からの測定が考えられよう。前者としては、「プライバシーを侵害する人」「弱みにつけ込む人」などに該当する人を挙げてもらう形式を用いた Rook (1984) の方法が、後者としては対人関係における出来事の生起頻度を尋ねた橋本 (1997b) の方法などがある。ただし、前者のような測定法、すなわち「ネガティブな属性を持つ他者」という指標は、対人的相互作用の結果として形成された印象としても考えられ、対人ストレスの原因というよりも、むしろ結果であるとも見なされよう。加えて、対人ストレスは「ネガティブな属性を持つ他者」との相互作用においてのみ生じるわけではないし、そもそもストレッサーは基本的には事態の生起として定義されるべき概念である (Wheaton, 1996)。その意味で、やはり対人ストレスは対人的相互作用から同定するのが適切であると考えられるので、今回作成する尺度もそのスタンスに立つものとする。

第3の留意すべき点は、測定対象となる対人関係の範囲である。デイリー・ハッスルズとしての対人ストレッサーに特化し、かつ対人的相互作用という観点から構成された尺度は、これまでもいくつか作成されている。具体的には、橋本 (1997b) の対人ストレスイベント尺度 (Interpersonal Stress Event Scale:

ISE)、Lahey, Tardiff, & Drew(1994)の Inventory Negative Social Interactions (INSD)、Ruehlman & Karoly(1991)による Test of Negative Social Exchange (TENSE) などがあり、これらはいずれも、対人関係全般を評定対象として、ネガティブな対人的相互作用の生起頻度を、多項目で測定するという共通点がある。しかし、これらの尺度には、測定対象が対人関係全般とされているがゆえに、それ以外の対人関係（特定二者関係など）における対人ストレス尺度としての使用に不適切な項目も含んでいる。そして、対人ストレスの生起頻度やインパクトが、親密性や関係性と連動する可能性を考慮すると、その議論のためにも、特定二者関係にも適用可能な対人ストレス尺度の作成が必要である。そこで今回は、なるべく適用範囲が広い尺度、すなわち特定二者関係からネットワーク全般まで、さまざまな対人関係における対人ストレスを測定しうる尺度を作成することを目的とする。

第4の留意点は、ストレス尺度としての位置づけを明確にする表現の使用である。たとえば Pierce, Sarason, & Sarason(1991)の Quality of Relationships Inventory (QRI) は、特定二者関係における葛藤を測定する下位尺度も含んでいるが、ここで測定されている葛藤とは、具体的には何を測定しているのか不明瞭である。なぜなら、この下位尺度には「どのくらい、生活に干渉してくるか」といった対人ストレス的な項目に加えて、「どのくらいいらいらさせるか」「どのくらいあなたを怒らせるか」「どのくらいプレッシャーになるか」といった、ストレス反応の観点から言及される項目や、「いざこざを避けるために、どのくらい努力をしてるか」「問題が生じたとき、どのくらい妥協しているか」など、コーピングの観点から言及される項目も含まれているからである。つまり、この尺度は、少なくとも特定関係における対人「ストレス」のみを測定しているわけではない。この研究も含め、先行研究における対人ストレス測定では、相互作用そのものの性質や内容よりも、むしろその結果としての心理的反応という点から、項目を文章化しているものが多い(e.g., Abbey, Abramis, & Caplan, 1985; Lepore, 1992; Major, Zubek, Cooper, Cozzarelli, & Richards, 1997; Sandler & Barrera, 1984)。しかし、ストレスに対する反応として生じた感情によって対人ストレスを定義することは、ストレスによってストレスを定義するというトートロジー（同語反復）に他ならない。そこで本研究では、受け手の感情やストレス状態の記述を極力含まないストレス項目の作成を目指した。

最後の留意点は、対人ストレスの多様性にまつわる問題である。既存の

対人ストレス尺度ではそこに下位尺度を想定しているものも多く、たとえば橋本 (1997b) の ISE では、ケンカや対立などの顕在的な葛藤事態である「対人葛藤」、劣等感を触発する事態やスキルの欠如により円滑なコミュニケーションが営めない「対人劣等」、そしてそのような対人問題の生起を未然に防ぐための配慮や気疲れがストレスを生じさせる「対人摩耗」という 3 類型が想定されている。尺度項目が概念の項目母集団 (ユニバース) を適切に反映することは、尺度の内容的妥当性を満たすための重要な要件であり、今回の尺度作成にあたっては、ストレッサーとなりうる対人的相互作用を、万遍なく含めることを基本的方針とした。また、既存の対人ストレス尺度項目においては、受動的 (「～された」) な記述による項目が多数を占める傾向にあるが、ストレッサーとなる対人的相互作用の中には、自身が行為主体であるもの (「～してしまった」) もあると思われる (橋本, 2003) ので、今回はその点にも配慮することとした。

以上の留意点を踏まえた上で、本論文では、さまざまな対人関係における日常的な対人ストレッサーを、包括的に捉えうるような新たな尺度を作成することを目的とする。

## 方 法

### 尺度項目案の作成

はじめに、先行研究 (e.g., 橋本, 1997b; 2002; Lakey, Tardiff, & Drew, 1994) における対人ストレッサー尺度項目や、対人ストレッサーとなりうる出来事のリストや自由記述 (e.g., Asher, Rose, & Gabriel, 2001; 橋本, 2003) を参考としつつ、先に記した本研究の意図に合致するよう、項目案を作成した。その結果、97 項目の第一次尺度項目案が作成された。

### 尺度項目の精選・構成方法

本研究では、さまざまな対人関係において適用可能な対人ストレッサー尺度の作成を目的としており、その条件を満たすためには、少なくともその尺度項目が、①相手や場合を問わずストレッサーとなりうること、②対人関係全般におけるそれらの出来事の生起がストレッサーとなること、③特定関係においてもそれらの出来事の生起がストレッサーとなること、などの条件を満たすことが求められる。しかし、これらの条件を単一調査でまとめて検討することは、現実的に困難である。そこで本論文では、上記の基準それぞれに基づく調査研

究を順次実施し、各回での採用基準を満たした項目のみ、それ以降の調査で使用する事とした。そこで、以下の3つの調査研究が実施された。

**研究Ⅰ：ストレス度評定** まずは研究Ⅰとして、第一次尺度項目案97項目の表面的妥当性を検討するために、『身の回りのさまざまな人々（友人や知人、家族や恋人、学校の先生、仕事やアルバイトの同僚や上司など）との日常的な関わり』において、仮に各項目の出来事を経験した場合のストレス度についての評定を求めた。選択肢は「1. 相手や場合にかかわらず、ほとんどストレスを感じないと思う」、「2. 相手や場合によっては例外もあるが、たいていはストレスを感じないと思う」、「3. 相手や場合によっては例外もあるが、たいていはストレスを感じると思う」、「4. 相手や場合にかかわらず、きっとストレスを感じると思う」の4件法である。これは、どのような対人関係においてもストレスサとなり得ない項目、すなわち大多数が「相手や場合にかかわらずストレスを感じない」項目を除外することを目的として実施したものである。また、この研究では、内容的に重複している項目をまとめること、および対人ストレスの下位類型についても探索的に検討することも目的とした。

**研究Ⅱ：全般的対人関係における経験頻度評定** 次に研究Ⅱでは、研究Ⅰの結果に基づいて構成された第二次尺度項目案72項目（抽出手続きは後述）を用いて、個人を取り巻く全般的対人関係における、対人ストレスサの経験頻度評定を求めた。この研究では、「最近1ヶ月に生じた出来事」という条件設定の上で、各項目の経験頻度について、4件法（「1. まったくなかった」「2. ほとんどなかった」「3. ときどきあった」「4. しばしばあった」）による評定を求めた。

全般的対人関係を評定対象としたのは、評定対象を限定することによる出来事の生起率低下や、ストレスサのインパクトの関係性による差異が、項目選定に影響を及ぼす可能性を考慮したものである。その分析を通じて、生起頻度が極端に高い／低い項目を除外し、かつ、下位尺度も含めて必要十分な項目数による尺度構成となるよう、項目を取捨選択することを、この研究では目的とした。

**研究Ⅲ：特定二者関係における経験頻度評定** さらに研究Ⅲでは、研究Ⅱの結果に基づいて構成された第三次尺度項目案30項目（抽出手続きは後述）を用いて、複数の特定二者関係における対人ストレスサの経験頻度評定を求めた。この研究の目的は、全般的対人関係における適用可能性が確認された項目群のうち、その下位尺度構造も含めて、特定二者関係においても適用可能な項目を

抽出することである。また、尺度の簡便性という観点から、項目数についても再検討した。

対人ストレッサーの測定方法としては、まず回答者全員に「A. 現在の生活で関わる機会がもっとも多い同性の知人」、「B. 同じく異性の知人」各1名の想起を求めた。さらに自宅生には「C. 同じく家族」、自宅生以外には「D. 日常生活で関わりがある人のうち、苦手になっている同性の知人」1名の想定を求めた。そして、想定した人（計3名）とはどのような関係か、知り合ってから期間、1週間あたりの接触頻度（日単位）、その関係の親密性、重要度、好意、満足感（各1項目6段階評定）で尋ね、さらに研究Ⅱで構成された対人ストレッサー尺度項目案30項目を、各特定二者関係について実施した。評定方法としては、過去2週間における各項目の出来事の経験頻度を、研究Ⅱと同じく「まったくなかった」～「しばしばあった」の4件法で尋ねた。

### 尺度の妥当性の検討方法

また、尺度の基準関連妥当性を検討するために、研究Ⅱと研究Ⅲでは、対人ストレッサー尺度に加えて、その他の尺度も同時に実施した。

**研究Ⅱ** 研究Ⅱでは、以下の尺度を実施した。

- 1) Stress Response Scale-18 (SRS-18) : ストレス反応を簡便に測定するための尺度として、鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬埜・坂野 (1998) によって作成された、3つの下位尺度（抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力）からなる18項目（下位尺度は各6項目）。ストレス反応とされる感情や行動を列挙し、それらが最近2、3日の状態としてどのくらい当てはまるかを、4件法（0：全くちがう～3：その通りだ）で質問する。
- 2) 改訂版 UCLA 孤独感尺度: Russell, Peplau, & Cutrona (1980) を邦訳した諸井 (1991) による、20項目4件法。今回は過去1ヶ月の対人ストレッサーとの対応を検討するという目的上、「次の文章に述べられていることがらを、それぞれ、ここ2週間、あなたはどのくらい感じていますか。」という教示で質問した。
- 3) 自尊感情尺度: 全体的な自尊感情を測定する Self Esteem Scale (Rosenberg, 1965) の邦訳版（山本・松井・山成, 1982）。10項目5件法。
- 4) General Health Questionnaire 28項目版 (GHQ28) : 中川・大坊 (1985) による、全般的な健康状態を測定する尺度の28項目版。身体的症状、不安と不眠、社会的活動障害、うつ状態という4つの下位尺度（各7項目）か



ら構成される。

これらの尺度は、以下の仮説を検討するために行われた。

**仮説 2-1)** 本論文で作成される対人ストレス尺度は、言うまでもなくストレスを測定するための尺度であり、その経験頻度が多いほど、ストレス反応も顕著になると想定される。したがって、対人ストレス尺度得点と、ストレス反応に関する尺度得点は正の関連をもつ。なお本研究では、SRS-18を直接的な心理的ストレス反応を測定する尺度として、GHQ28を身体的ストレス反応も含んだ全般的な精神的健康度を測定する尺度として、それぞれ想定・使用した。

**仮説 2-2)** 本尺度は対人関係上の問題に特化した尺度なので、対人関係のあり方を反映する指標との関連についても検討する。まず、対人ストレスの中でも、特に他者から拒絶的な関わりをされることは、孤独感をもたらすと考えられる (e.g., 相川, 2000) ので、対人ストレス、特に拒絶的な対人的相互作用の経験頻度は、孤独感と正の関連を有すると考えられる。また、肯定的な自己概念は対人関係を媒介して適応や精神的健康と関連すること、もしくは、そもそも自尊感情とは対人関係の良好性を反映する指標であることが、これまで多くの研究で指摘されている (レビューは遠藤, 1995; 1999)。したがって、対人関係においてネガティブな経験が多いほど自尊心は低くなると思われるので、対人ストレス経験頻度と自尊心の間には、負の関連があると考えられる。

**研究Ⅲ** 研究Ⅲでは、社会的スキル尺度である KiSS-18 (菊池, 1988) と、ストレス反応尺度の SRS-18 (鈴木ら, 1998) を実施した。

これらの尺度は、以下の仮説を検討するために行われた。

**仮説 3-1)** 社会的スキルは、対人関係を適切かつ効果的に営むための能力・技術である。したがって、橋本 (1997b) 言うところの対人葛藤や対人劣等に類する対人ストレス、すなわち顕在的な対人ストレスの生起頻度は、社会的スキルと負の関連を示すと考えられる。ただし、橋本 (1997b) 言うところの対人摩擦に類する対人ストレス、すなわち潜在的な対人ストレスの生起頻度と社会的スキルの関連については、さまざまな可能性が想定されるので、この点については特に仮説を設けず検討する。

**仮説 3-2)** 特定関係においても、対人ストレスの経験頻度が多いほど、ストレス反応も顕在化すると思われる。すなわち、対人ストレスとストレス反応の間には、基本的に正の関連があると予測される。

## 対象・手続き

**研究Ⅰ** 調査は2003年2月から4月にかけて、大学生・専門学校生371名を対象に、講義時間中に質問紙法により一斉に実施した。うち、回答に不備があった者20名、回答チェック用項目への回答が不適切であった者\*26名、さらに回答者の同質性を確保するため、30歳以上の3名を、分析対象から除外した。その結果、分析対象は342名（男性130名、女性212名、平均年齢19.48歳、標準偏差1.20）となった。

**研究Ⅱ** 調査は2003年10月下旬、大学生・専門学校生156名を対象に、講義時間中に質問紙法により一斉に実施した。調査にあたっては、質問項目数が多いことを考慮して、質問紙を前半（個人属性と対人ストレス尺度）と後半（SRS-18、UCLA孤独感尺度、自尊感情尺度、GHQ28）に分け、講義時間の最初と最後にそれぞれ実施し、まとめて封筒に入れて回収した。その結果、156名から回答を得たが、回答に不備があった者9名、さらに被験者の同質性を確保するため、30歳以上の2名を分析対象から除外した。その結果、分析対象は145名（男性49名、女性96名、平均年齢19.99歳、標準偏差1.32）となった。

**研究Ⅲ** 調査は2004年5月、大学生を対象として、講義時間中に質問紙法で一斉に実施した。その結果、150名（男性53名、女性97名、平均年齢19.70歳、標準偏差0.89）からの有効回答を得た。

## 結 果

### 尺度項目の選定および下位尺度の構成

**研究Ⅰにおける項目抽出** はじめに全97項目の平均値を算出し、選択肢の内容から平均値が2.0未満であった1項目を、ストレス項目として不適切であると判断して除外した。

次に、内容的に重複している項目を集約するために、項目間での単相関を算出し、相関係数が $r > .50$ 以上であった項目同士については、より包括的な表現である方の項目のみを採用することとした。その結果、10項目が除外された。

さらに、下位尺度を構成するための予備的分析として、クラスター分析（階層クラスタ分析、平方ユークリッド距離によるWard法）と因子分析（主因子法）による項目のグルーピングを、グループ構造が安定するまで繰り返した（詳

---

\*2 「(例) この項目はチェック用なので、2に○をつけて下さい」という項目に対して、2以外の数字に○をつけた人。

細は紙面の都合で割愛する)。その結果、72項目が4つのクラスターに区分され、そこに含まれなかった14項目を除外した。ちなみに、4つのクラスターの内容は、大まかには「A. 相手が自分を搾取したり権利を侵害している状況(20項目)」、「B. 相手が自分への配慮に欠け、自分はそれを我慢している状況(21項目)」、「C. 自分の行為が相手に不快感をもたらしかねない状況(17項目)」、「D. 実質的な被害を被るわけではないが、相手が自分を否定・軽視している状況(14項目)」であった。また、クラスター間の関係としては、まずAクラスターとDクラスターが連結し、それらとCクラスターが連結し、それらとBクラスターが連結するという位置づけであった。AクラスターとDクラスターはともに「相手の行為による問題」という共通点があり、さらにそれらとCクラスターは「関与することによる問題」という共通点があると思われる(Bクラスターは「関与しないことによる問題」と言えよう)。

以上の手続きを経て、研究Iでは25項目が除外され、残り72項目を第二次尺度項目案として採用した。

**研究IIにおける項目抽出** はじめに、経験頻度が極めて高い/低い項目を除外するために、対人ストレス各項目に対する回答の度数分布、平均値、標準偏差を求めた。その結果、経験頻度がもっとも高かった項目(「相手と意見や考え方、価値観などが食い違った」 $M = 2.82, SD = 0.86$ )でも、その平均値は極端に高いというわけではなく、尺度項目として不適切と思われるほど経験頻度が高い項目はないと判断した。一方、経験頻度の平均値が最低であった「あなたの所有物を相手に壊されたり傷つけられた」( $M = 1.23, SD = 0.50$ )は、度数分布でもおよそ80%の人が「まったくなかった」と回答しており、尺度項目として不適切であるとも考えられる。しかし、その項目内容から経験頻度の低さは妥当な結果であり、かつそのインパクトは大きいであろうことを考慮し、この段階ではこの項目も除外しないこととした。よって、この段階ではいずれの項目も除外しなかった。

次に、下位尺度を構成するために、全72項目による因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行ったところ、固有値の減衰状況(20.86,3.30,3.21,2.26,2.02...)から、1因子性もしくは3因子性と判断された。そこで3因子解を採用し、「特定因子に対する因子負荷が.40以上、それ以外の因子に対する因子負荷が.40以下という基準を満たさない項目を除外する」という条件で因子分析を繰り返したところ、52項目(第I因子23項目、第II因子17項目、第III因子12項目)が抽出された。さらに、これら各因子の内容について、研究Iの暫定的分類との

対応を検討した。まず第Ⅰ因子は、そのほとんど（20項目）が研究ⅠにおけるAクラスター（相手からの搾取・侵害）とDクラスター（相手からの否定・軽視）に該当するものであった。したがって、第Ⅰ因子は基本的にAとDの合成であると判断し、それに該当しない3項目は除外することとした。AとDは研究Ⅰでもクラスター間の距離が最も近く、内容的にも弁別性は低いと思われたので、以降はこれらをひとつのまとまりとして扱うこととした。第Ⅱ因子は17項目中13項目が、研究ⅠにおけるBクラスター（相手の無関心・自分の我慢）に該当したので、それに該当しない4項目を除外した。第Ⅲ因子は、12項目中11項目が、研究ⅠにおけるCクラスター（自身の過失による問題）に該当したので、あとの1項目を除外した。

以上のプロセスで採用された計44項目について、再度因子分析を実施したところ、やはり3因子解と解釈されたが、1項目のみ複数因子に.40の負荷を示した。そこで、その1項目をさらに除外した43項目で再度因子分析を行ったところ、A「相手からの搾取・侵害」もしくはD「相手からの否定・軽視」に該当する第Ⅰ因子（20項目）、B「相手の無関心・自分の我慢」に該当する第Ⅱ因子（12項目）、C「自身の過失」に該当する第Ⅲ因子（11項目）、という想定したとおりの項目分類が示された。最後に、バランスのとれた尺度構成とするために、下位尺度の項目数を各10項目と想定して、各因子に対する負荷が高い順それぞれ上位10項目、計30項目を用いて、再度因子分析を行ったところ、想定通りに3因子それぞれに対して10項目ずつが.40以上の負荷を示した。したがって、この3因子を対人ストレスナーの下位類型と想定し、内容からそれぞれを「対人葛藤 (interpersonal conflict)」、「対人摩耗 (interpersonal friction)」、「対人過失 (interpersonal blunder)」と命名した。これら3下位類型の内容を確認すると、まず「対人葛藤」因子には、他者からのネガティブな態度や行動に関する項目群が高い負荷を示している。次に「対人過失」因子には、自身に非があって相手に迷惑や不快な思いをさせてしまうような項目群が高負荷を示している。そして「対人摩耗」因子には、自他共にネガティブな心情や態度を明確に表出していないが、円滑な対人関係を維持するためにあえて意に添わない行動をしたり、相手に対する期待はずれを黙認するような項目群が高負荷を示している。

以上の手続きを経て、研究Ⅱでは42項目を除外し、残り30項目を第三次尺度項目案として採用した。

**研究Ⅲにおける項目抽出** はじめに、研究Ⅱで見いだされた対人ストレスナー

尺度の下位類型が、さまざまな特定二者関係を対象とした評定でも適用されるかを検討するために、①すべての対人ストレス尺度評定(同性知人  $N = 146$ 、異性知人  $N = 147$ 、家族  $N = 49$ 、苦手な同性知人  $N = 95$ )を便宜的に独立データと見なした、のべ437名分の全関係データ；②同性知人データ；③異性知人データ；のそれぞれについて、因子分析(いずれも3因子解を想定した主因子法、バリマックス回転)を実施した(家族と苦手な同性知人は、データ数が不十分と判断して個別の因子分析は行わなかった)。

その結果、対人葛藤項目として想定された10項目中6項目は、全関係・同性知人・異性知人いずれの分析においても、同一因子に.40以上の負荷を示し、その他の因子に対する因子負荷は.40未満であった。したがって、これら6項目は関係性を問わず対人葛藤項目として使用可能であると判断し、これら6項目を最終的な対人葛藤項目として採用した。次に、対人摩擦項目として想定された10項目のうち、全関係・同性知人・異性知人いずれの分析においても同一因子に.40以上の負荷を示し、それ以外の因子に対する因子負荷が.40未満であったのは、やはり6項目であった。したがって、これら6項目は、関係性を問わず対人摩擦項目として使用可能と判断し、それら6項目を最終的な対人摩擦項目として採用することとした。さらに、対人過失項目として想定された10項目は、うち9項目が、全関係・同性知人・異性知人いずれを対象とした分析においても、同一因子に.40以上の負荷を示し、それ以外の因子に対する因子負荷は.40未満であった。したがって、これら9項目は、関係性を問わず対人過失項目として使用可能と思われるが、対人葛藤項目・対人摩擦項目と項目数をそろえるために、該当因子以外の因子負荷がいずれも.30以下である6項目を、最終的に対人過失項目として採用することとした。

以上の手続きを経て選定された、対人葛藤・対人摩擦・対人過失それぞれに該当する各6項目、計18項目を、最終的な「対人ストレス尺度(The Scale of Interpersonal Stressor: SIS)」の尺度項目とした(Table 1)。また、各尺度に該当する項目得点の合計を項目数で除したものを、対人ストレス各下位尺度得点とした。

### 対人ストレス各下位尺度の特徴

研究I: ストレス度評定の観点から 最終的な下位尺度構成(各6項目)に則って、研究Iにおけるそれらの尺度得点を算出したところ、まず対人葛藤( $\alpha = .69$ )は  $M = 3.30$  ( $SD = 0.46$ )、対人過失( $\alpha = .76$ )は  $M = 3.11$  ( $SD = 0.51$ )、対

Table 1 対人ストレッサー尺度項目

【教示】あなたと、〇〇とのあいだで、最近およそ1ヶ月のあいだ、以下のようなできごとが、どのくらいありましたか。1(まったくなかった)～4(しばしばあった)のなかから、もっともよくあてはまると思うもの、いずれかひとつに○をつけてください。

- 1 あなたの落ち度を、〇〇にきちんと謝罪・フォローできなかった。
- 2 〇〇に対して果たすべき責任を、あなたが十分に果たせなかった。
- 3 あなたの意見を〇〇が真剣に聞こうとしなかった。
- 4 あなたのミスで〇〇に迷惑や心配をかけた。
- 5 〇〇からけなされたり、軽蔑された。
- 6 あなたのあからさまな本音や悪い部分が出ないように気を使った。
- 7 〇〇にとってよけいなお世話かもしれないことをしてしまった。
- 8 〇〇から絶交や関わりの拒否をほのめかされたり、提案された。
- 9 〇〇に過度に頼ってしまった。
- 10 〇〇が都合のいいようにあなたを利用した。
- 11 その場を収めるために、本心を抑えて〇〇を立てた。
- 12 〇〇に合わせるべきか、あなたの意見を主張すべきか迷った。
- 13 あなたを信用していないような発言や態度をされた。
- 14 〇〇の仕事や勉強、余暇のじゃまをってしまった。
- 15 〇〇の機嫌を損ねないように、会話や態度に気を使った。
- 16 本当は指摘したい〇〇の問題点や欠点に目をつむった。
- 17 〇〇を注意したら逆切れされた。
- 18 本当は伝えたいあなたの悩みや願いを、あえて口にしなかった。

注:

- 1) 下位尺度得点は、対人葛藤項目(3, 5, 8, 10, 13, 17)、対人過失項目(1, 2, 4, 7, 9, 14)、対人摩耗項目(6, 11, 12, 15, 16, 18)それぞれについて、合計を項目数(6)で割った値を使用する。
- 2) 全般的もしくは複数の対人関係について回答を求める場合は、教示において〇〇の部分で評定対象を同定した上で、各項目の〇〇の部分で「相手」とする。特定二者関係について回答を求める場合は、教示において〇〇の部分で評定対象を特定し(ex. Aさん)、各項目の〇〇の部分についても、その呼称をあてはめる。
- 3) 本論文では上記18項目を使用しているが、8番と17番の2項目については、本論文以降の研究において、ある種の特定二者関係にはそぐわない表現であることが明らかになった。そこでそれ以降の研究では、それら2項目について文意を損なわないように表現を修正し(8番「あなたと関わりたいくさそう態度やふるまいをされた」、17番「〇〇の問題点や欠点について注意・忠告をしたら、逆に怒られた」)、それを最終的な対人ストレッサー尺度完成版とすることとした。

人摩耗 ( $\alpha = .74$ ) は  $M = 2.67$  ( $SD = 0.56$ ) であった (ちなみに全体では  $M = 3.03$ ,  $SD = 0.39$ ,  $\alpha = .82$  であった)。また、これら下位尺度得点について被験者内要因の 1 要因分散分析を実施したところ、その差は有意であり ( $F(2,682) = 215.12$ ,  $p < .001$ )、多重比較 (Bonferroni 法) の結果、すべての水準間に有意差が見いだされた (いずれも  $p < .001$ )。すなわち、対人ストレスの中でも対人葛藤のインパクトが最も強く、次いで対人過失、そして対人摩耗のインパクトが最も小さいと言えよう。ちなみに、 $t$  検定による性差の検討では、対人葛藤 ( $t(340) = 3.29$ ,  $p < .01$ )、対人摩耗 ( $t(340) = 3.97$ ,  $p < .001$ )、そして対人ストレッサー全体 ( $t(340) = 3.50$ ,  $p < .01$ ) で性差が有意であり、いずれも女性の方が高得点であった (対人葛藤: 男性  $M = 3.20$ 、女性  $M = 3.36$ ; 対人過失: 男性  $M = 2.52$ 、女性  $M = 2.76$ ; 対人ストレッサー全体: 男性  $M = 2.94$ 、女性  $M = 3.08$ )。すなわち、対人過失のストレス度に性差はないものの、その他の対人ストレッサーは男性よりも女性の方が、よりストレスフルと見なす傾向にあるようだ。さらに、下位尺度間相関を求めたところ、対人葛藤と対人過失が  $r = .21$ 、対人葛藤と対人摩耗が  $r = .52$ 、そして対人過失と対人摩耗が  $r = .35$  と、いずれも有意 ( $p < .001$ ) な正の相関を示した。また、男女ごとに相関を求めた場合も、対人葛藤と対人摩耗の相関がもっとも高く、対人葛藤と対人過失の相関がもっとも低かった。したがって、対人ストレッサーへのストレス感受性は、下位尺度を通じてある程度共通する部分もあるものの、対人葛藤への脆弱性と対人過失への脆弱性はある程度は独立しており、対人摩耗への脆弱性はその両者と連動するようである。

**研究Ⅱ：全般的対人関係における経験頻度の観点から** 次に研究Ⅱのデータについても、最終的な下位尺度構成に基づく尺度得点を算出したところ、対人葛藤 ( $\alpha = .78$ ) は  $M = 1.72$  ( $SD = 0.57$ )、対人過失 ( $\alpha = .82$ ) は  $M = 2.32$  ( $SD = 0.64$ )、対人摩耗 ( $\alpha = .80$ ) は  $M = 2.65$  ( $SD = 0.67$ ) であった (ちなみに全体では  $M = 2.23$ ,  $SD = 0.50$ ,  $\alpha = .87$  であった)。さらに、これらの差を被験者内 1 要因分散分析で検討したところ、これらの差は有意であり ( $F(2,288) = 4.50$ ,  $p < .001$ )、多重比較 (Bonferroni 法) の結果、すべての水準間の差が有意 ( $p < .001$ ) であった。これを研究Ⅰの結果と併せて考えると、対人葛藤は経験頻度がもっとも少ないが経験したときのインパクトは大きく、対人摩耗は逆に経験頻度は多いがインパクトはそれほど強くなく、そして対人過失は経験頻度もインパクトもそこそこであると考えられる。これらの結果は、各類型の構成概念妥当性の傍証のひとつと考えられよう。

ちなみにこれらの性差を  $t$  検定で検討したところ、いずれも性差は有意でなかった。また、下位尺度間の相関を求めたところ、対人葛藤と対人過失が  $r = .47$ 、対人葛藤と対人摩耗が  $r = .45$ 、対人過失と対人摩耗が  $r = .40$  と、いずれも有意な正の相関を示した。男女ごとに相関を求めても、組み合わせによる相関係数に大差はなかったが、男性はその相関係数が相対的に高く ( $r_s = .54 \sim .58$ )、女性は低い ( $r_s = .29 \sim .39$ ) 傾向が見いだされた。

**研究Ⅲ：特定二者関係における経験頻度の観点から** 各特定二者関係における対人ストレス下位尺度得点の平均値を求めた (Figure 1)。ちなみに、同性知人、異性知人、家族、苦手知人それぞれの関係評定による、各下位尺度の信頼性係数を算出したところ、 $\alpha = .71 \sim .86$  であり、すべての尺度について信頼性を有すると判断した。

まず同性知人に関しては、すべての回答者が同級生や友人 (先輩・後輩含む) を想定していたので全回答の平均を求めたところ、対人葛藤 ( $M = 1.34$ ,  $SD = 0.38$ ) よりも、対人過失 ( $M = 2.01$ ,  $SD = 0.60$ )、対人摩耗 ( $M = 1.90$ ,  $SD = 0.58$ ) が相対的に高得点であった。また、対人葛藤のみ、男性 ( $M = 1.42$ ) が女性 ( $M = 1.30$ ) より高得点という性差の有意傾向 ( $t(147) = 1.96$ ,  $p = .052$ ) が見いだされた。次に、異性知人として挙げられたのは、「恋人」(男性 16 名、女性 33 名) と「友人」(男性 20 名、女性 30 名) が相対的に多かった。そこで、

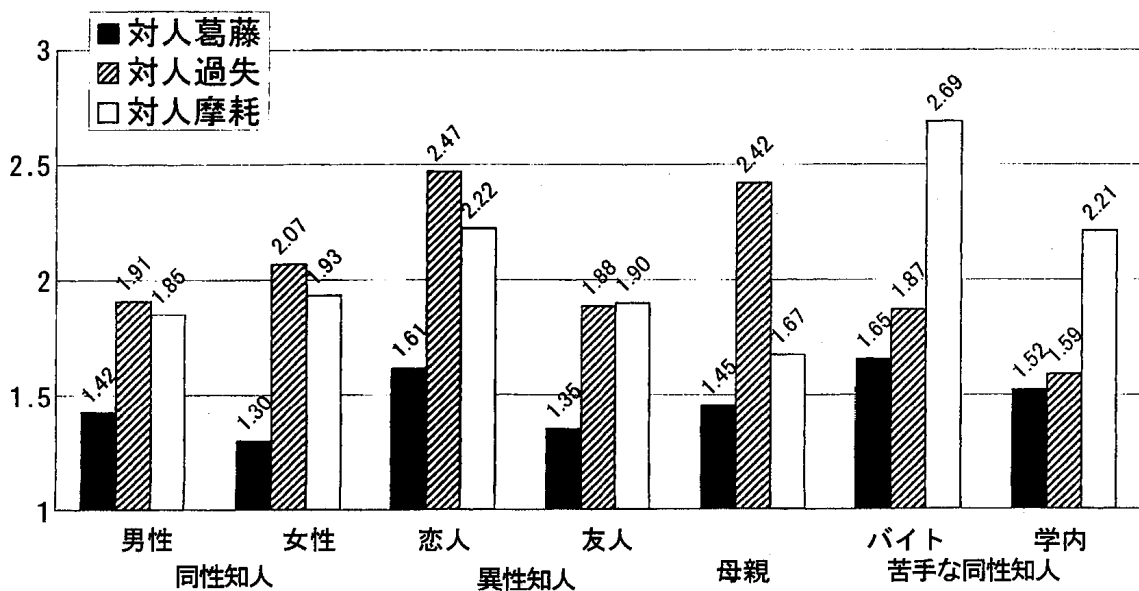


Figure 1 さまざまな特定二者関係における対人ストレス下位尺度の平均値(研究Ⅲ)



関係の種類（恋人／友人）と性別を独立変数、対人ストレッサー各尺度得点を従属変数とした2要因分散分析を行ったところ、いずれも関係の種類の主効果のみが有意であり、すべて恋人群の方が友人群より高得点であった。（対人葛藤： $F(1,94) = 8.25$ 、 $p < .01$ ；対人過失： $F(1,94) = 17.35$ 、 $p < .001$ ；対人摩耗： $F(1,94) = 4.86$ 、 $p < .05$ ；対人ストレッサー合計： $F(1,94) = 14.10$ 、 $p < .001$ ）。家族としては、「母親」を挙げた人が相対的に多かった（男性5名、女性32名）ので、「母親」のみについて平均値を求めたところ、他の関係よりも対人摩耗が相対的に少ないという傾向が見いだされた。最後に、苦手な同性知人として挙げられたのは、「バイト先の人」（24名）、「同級生」（48名）、「先輩」（15名）、「後輩」（6名）であった。そこで、同級生・先輩・後輩をまとめて「学内群」（68名）として、関係の種類（バイト群／学内群）による  $t$  検定を行ったところ、対人過失（ $t(89) = 2.18$ 、 $p < .05$ ）と対人摩耗（ $t(89) = 2.47$ 、 $p < .05$ ）で有意差が見いだされ、いずれもバイト群の方が高得点であった。この結果は、学内の苦手な人との関わりは避けようと思えば避けられるが、バイト先ではそういうわけにもいかず、その結果、対人ストレッサーを経験することも多いという可能性を示唆している。ただし、苦手な同性知人に関する結果については、データ数の少なさに加えて、「関わらないようにしているので、ストレッサー自体が生じない」という可能性もあり、参考程度に留めるべきであろう。

ところで研究Ⅲでは、各特定二者関係の関係性（関係継続期間、接触頻度、関係の親密性・重要性・好意度・満足度）についても質問している。そこで、同性知人と異性知人については、それらの関係性指標と対人ストレッサーの関連についても検討した（Table 2）。

Table 2 同性知人・異性知人における対人ストレッサー下位尺度と関係性指標の相関係数(研究Ⅲ)

		接触頻度	親密性	重要性	好意	満足度
同性知人 ( $N=149\sim 150$ )	対人葛藤	.20*	-.02	-.22**	-.20*	-.30***
	対人過失	.26**	.18*	.29***	.25**	.08
	対人摩耗	.17*	.00	-.04	-.07	-.26**
恋人 ( $N=49$ )	対人葛藤	.04	-.42**	-.34*	-.28	-.43***
	対人過失	.16	-.03	.17	-.10	-.01
	対人摩耗	.03	-.19	-.03	.06	-.20
異性友人 ( $N=47\sim 49$ )	対人葛藤	.20	-.32*	-.18	-.20	-.35*
	対人過失	.23	.19	.26	.31*	-.02
	対人摩耗	.11	.02	.15	.19	-.30*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

まず同性知人における週あたりの接触頻度、関係性4指標と対人ストレス尺度の相関を求めたところ、いずれの対人ストレス指標も、接触頻度と有意な正の相関を示した。すなわち、接触頻度が多いほど、対人ストレスも経験しやすいと考えられる。しかし、関係性評価と対人ストレスの相関はさまざまであり、対人葛藤は重要性・好意・満足度と有意な負の相関を示したが、親密性とは有意な相関を示さなかった。対人過失は、親密性・重要性・好意と有意な正の相関を示したが、満足度とは有意な相関を示さなかった。対人摩擦は、満足度とのみ負の相関を示し、親密性・重要性・好意とは有意な相関を示さなかった。さらに、性別ごとに関係性評価と対人ストレスの相関を求めたところ、男性では対人葛藤・対人摩擦と関係性評価の間に有意な相関は示されず、対人過失のみ、重要度 ( $r = .44, p < .01$ )・好意 ( $r = .42, p < .01$ )と有意な正の相関を示した。それに対して女性では、週あたりの接触頻度がすべての対人ストレス指標と有意な正の相関を示したのに加え、対人葛藤と対人摩擦がともに重要性 (葛藤  $r = -.30, p < .01$  ; 摩擦  $r = -.24, p < .05$ )・好意 (葛藤  $r = -.33, p < .01$  ; 摩擦  $r = -.24, p < .05$ )・満足度 (葛藤  $r = -.36, p < .001$  ; 摩擦  $r = -.43, p < .001$ )と有意な負の相関を示したが、対人過失はいずれの関係性評価指標とも、有意な相関を示さなかった。以上の結果は、同性友人関係における関係性評価と対人ストレスの関連パターンが、男女で異なる可能性を示唆している。

次に異性知人について、関係(恋人/友人)ごとに関係性指標と対人ストレスの相関を求めたところ、接触頻度はいずれも有意な相関を示さず、恋人群では対人葛藤が親密性・重要度・満足度と有意な負の相関を示したが、対人過失・対人摩擦は有意な相関を示さなかった。一方友人群では、対人葛藤が親密性・満足度と有意な負の相関を示したのに加えて、対人過失が好意と正の相関を、対人摩擦が満足度と負の相関を示した。これらの結果は、対人葛藤は関係の種類を問わず満足感と負の関連をもつこと、対人摩擦は恋人よりも友人関係で満足感と関連しやすいことなどを示している。

### 対人ストレス尺度の基準関連妥当性

**研究Ⅱ** SRS-18、改訂版 UCLA 孤独感尺度、自尊感情尺度、GHQ28 の下位尺度を含む信頼性を求めたところ、いずれも原典の尺度構成による信頼性が確認されたので、それぞれ原典の尺度構成をそのまま採用し、それらと対人ストレス下位尺度との尺度間相関を求めた (Table 3)。

Table 3 対人ストレスア下位尺度とストレス反応・孤独感・自尊感情の相関係数(研究Ⅱ)

	対人葛藤	対人過失	対人摩耗	M	SD	$\alpha$
SRS 総得点	.23**	.46***	.31***	23.32	11.39	.90
抑うつ・不安	.22**	.46***	.29***	8.18	4.65	.82
不機嫌・怒り	.19*	.21*	.15	6.46	4.33	.84
無力感	.19*	.50***	.35***	8.68	4.41	.81
GHQ 総得点	.34***	.49***	.30***	61.88	13.91	.92
身体的症状	.28**	.35***	.19*	17.03	4.89	.83
不安と不眠	.38***	.49***	.36***	16.71	4.23	.79
社会的活動障害	.15	.29***	.19*	16.00	3.37	.72
うつ状態	.24**	.40***	.24**	12.14	5.04	.91
UCLA 孤独感尺度	.24**	.20*	.17*	39.13	9.55	.90
自尊感情尺度	-.11	-.31***	-.13	28.97	7.28	.83

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

いずれも  $N = 145$

その結果、まず対人ストレスアと SRS-18 の関連については、ほとんどの尺度間で有意な正の相関が示された。相対的には、対人葛藤との相関がやや弱い傾向にあるが、これは対人葛藤の生起頻度の低さによるものと思われる。また、「抑うつ・不安」「無気力」との相関が、対人葛藤は対人過失・対人摩耗に比して小さいのに対し、「不機嫌・怒り」とは対人葛藤も対人過失・対人摩耗と同程度の相関を示したことは、若干ながらも、対人ストレスア下位尺度の構成概念妥当性の傍証と考えられるかもしれない。さらに対人ストレスア尺度と GHQ28 も、ほとんどの尺度間で有意な正の相関を示し、特に対人過失との結びつきが強かった。また、対人葛藤と対人摩耗は生起頻度が大きく違うにもかかわらず、ほぼ同等の相関を示していることは、対人葛藤のインパクトの強さ、対人摩耗のインパクトの弱さを示唆しており、これも構成概念妥当性の論拠のひとつとなりえよう。以上の結果から、仮説 3-1 は基本的に支持されたと考えられる。

次に、対人ストレスア尺度と孤独感得点のあいだにも、いずれも有意な正の相関が示された。下位尺度ごとの相関では、対人葛藤が対人過失・対人摩耗よりも、若干高い相関係数を示している。孤独感が他者からの拒絶と少なからず連動するものであること、そして拒絶的な対人的相互作用は、本尺度においては対人葛藤尺度に含まれていることから、この結果は仮説を支持しているものと考えられよう。また、孤独感の強い人は、自分自身のみならず他者に対しても否定的な見方をする傾向があることも指摘されている (e.g., Rotenberg, 1994)。ここからも、対人過失・対人摩耗よりも他罰的なニュアンスが強い対人葛藤の方が、孤独感とより強く関連する可能性が推察される。その意味でも、

この結果は下位尺度の構成概念妥当性を支持する結果であるといえよう。対人ストレス尺度と自尊感情の相関では、対人過失のみが有意な負の相関を示した。この結果は、対人過失がその他の下位尺度よりも自責的であることに由来することによるのではないだろうか。以上の結果から、仮説3-2も、基本的には支持されたと考えられる。

**研究Ⅲ** 社会的スキル尺度 (KiSS-18) 全 18 項目の合計を社会的スキル得点として ( $M = 52.73$ ,  $SD = 10.86$ ,  $\alpha = .88$ )、先述した関係の種類 (男性同性知人、女性同性知人、異性友人、恋人、母親、バイト先の苦手な知人、学内の苦手な知人) ごとに、社会的スキルと対人ストレスの相関を求めた (Table 4)。その結果、まず対人葛藤と社会的スキルの関連は、学内の苦手な知人においてのみ有意な負の相関が示され、その他の関係では有意な相関は示されなかった。対人葛藤は生起頻度そのものが低いので、相関も現れにくかったと思われる。次に対人過失と社会的スキルの相関については、女性同性知人と異性友人のみで有意な負の相関を示した。そして対人摩擦については、女性同性知人のみで有意な負の相関が示されたが、その他の関係では有意な相関は示されなかった。したがって、対人摩擦は基本的に社会的スキルとあまり関連がないと考えられる。以上の結果から、仮説3-1は部分的な支持に留まった。

**Table 4** 対人ストレス下位尺度と社会的スキル・ストレス反応の相関係数(研究Ⅲ)

	男性同性知人 ( $N=51\sim 52$ )	女性同性知人 ( $N=97$ )	恋人 ( $N=49$ )	異性友人 ( $N=48\sim 49$ )	母親 ( $N=37$ )	バイト苦手知人 ( $N=23$ )	学内苦手知人 ( $N=68$ )
KISS-18	.11	-.05	-.09	-.07	-.09	-.07	-.26*
	-.06	-.33**	-.02	-.38**	-.06	-.04	-.23
	-.00	-.21*	-.17	-.24	-.06	-.04	-.23
SRS 合計	-.12	.13	.19	.19	.14	.01	.32**
	.19	.30**	.23	.37*	.22	.21	.15
	-.13	.14	.25	.30*	.15	.16	.27*
抑うつ・不安	-.12	.05	.21	.06	.04	.05	.30*
	.16	.22*	.27	.35*	.24	.22	.11
	-.19	.07	.26	.27	.13	.28	.25*
不機嫌・怒り	-.07	.11	.17	.24	.17	.13	.30*
	.14	.18	.07	.20	.20	.16	.10
	-.17	.01	.12	.14	.06	.16	.14
無気力	-.11	.17	.13	.19	.16	-.17	.25*
	.22	.36***	.26	.41**	.13	.16	.20
	.03	.28**	.26	.37**	.19	-.05	.34**

上段が対人葛藤、中段が対人過失、下段が対人摩擦それぞれとの相関係数。

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

次に対人ストレスとストレス反応 (SRS-18) の関連について、原典の尺度構成 (抑うつ・不安  $M = 8.42$ 、 $SD = 5.46$ 、 $\alpha = .89$ ; 不機嫌・怒り  $M = 6.13$ 、 $SD = 4.92$ 、 $\alpha = .86$ ; 無気力  $M = 8.48$ 、 $SD = 4.64$ 、 $\alpha = .79$ ; SRS-18 全体  $M = 23.04$ 、 $SD = 13.02$ 、 $\alpha = .92$ ) に則って、関係の種類ごとに、対人ストレスとの相関を求めた (Table 4)。その結果、まず対人葛藤は、学内の苦手な知人においてのみ、すべてのストレス反応指標と有意な正の相関を示した。学内の苦手知人との対人葛藤は、社会的スキルとも有意な負の相関を示したことから、その他の関係とは異なる独特のインパクトがあるのかも知れない。加えて、「不機嫌・怒り」と有意な正の相関を示した対人ストレスは全体でこの場合 (学内苦手知人との対人葛藤) だけだったことは、対人葛藤の構成概念妥当性をわずかながら支持するものであるとも考えられる。次に対人過失とストレス反応の相関については、女性同性知人と異性友人においてのみ、「抑うつ・不安」および「無気力」と有意な正の相関を示した。そして対人摩擦については、女性同性知人、異性友人、そして学内苦手知人で「無気力」と有意な正の相関を示し、学内苦手知人ではさらに「抑うつ・不安」とも有意な正の相関を示した。対人摩擦が対人トラブルの前段階と考えれば、対人葛藤がストレスになりやすい学内苦手関係、対人過失がストレスになりやすい女性同性知人や異性友人関係において、対人摩擦とストレスの関連が見いだされることは、それなりに妥当な結果であると考えられよう。以上の結果から、仮説 3-2 に関しても、部分的支持に留まったと考えられよう。

## 考 察

### 対人ストレス下位類型について

本論文では 3 回の調査を通じて、さまざまな対人関係における日常的な対人ストレスを包括的に捉えうるような対人ストレス尺度の開発を目的とした。その結果、経験頻度が少ないが経験したときのインパクトは大きい「対人葛藤」、逆に経験頻度は多いがインパクトはそれほど強くない「対人摩擦」、そして経験頻度もインパクトもそこそこの「対人摩擦」という 3 種類の対人ストレス下位尺度 (各 6 項目) を含む、全 18 項目の尺度が構成された。ここで構成された 3 類型は、橋本 (1997b) で想定された「対人葛藤」「対人劣等」「対人摩擦」と内容的に類似しており、これらの結果は、対人ストレスには基本的に 3 種類あることを示唆している。対人ストレスの基本類型としては

2種類説と3種類説の2つの説が考えられるが(橋本, 2003)、そのどちらが妥当なのかをさらに検討するためにも、本論文で開発された尺度を用いての、さらなる研究が望まれよう。

ちなみに研究Ⅲでは、3パターンの因子分析を通じて、同一因子にのみ高い負荷を示した項目のみを、尺度項目として採用した。したがって、それ以外の項目、たとえば「あなたが本当はしたくないことを、〇〇に無理強いされた」「あなたを困らせるような不平不満を言われた」「〇〇に意見や考えを押しつけられた」の3項目は、全関係・異性知人評定では対人葛藤因子のみに負荷を示したが、同性知人評定において対人摩擦因子にも高い負荷を示したので、最終的な尺度項目からは除外された。しかしこのことは、これら3項目が基本的に対人葛藤的でありつつも、同性知人との関係では対人摩擦的要素も含んでいる、と解釈することも可能である。すなわち、これは同一の対人的相互作用でも、関係性によってその意味づけが変容することを示唆する興味深い結果ではあるとも考えられよう。本論文では、関係の種類を問わず適用可能な尺度の開発というコンセプトに則って、これらの項目は除外されることとなったが、上記の点も含め、現実の対人ストレスには、今回の尺度に含まれるような、さまざまな関係の共通項としてのもののみならず、個々の関係性に特有のものもあることについては、留意する必要があるだろう。

### 特定二者関係における対人ストレス

本論文の研究Ⅲでは、これまであまり検討されることのなかった、さまざまな特定二者関係における対人ストレス下位尺度について検討した。

その主な結果としては、①女性よりも男性の方が、同性友人関係における対人葛藤経験頻度が多い；②いずれの対人ストレスについても、異性友人関係より恋人関係の方が経験しやすい；③家族関係(母親との関係)では、その他の関係に比して対人摩擦が相対的に少ない；④男性と女性では、同性友人関係における関係性評価と対人ストレスの関連パターンが異なる；⑤関係性を問わず、対人葛藤の多さは満足度の低さと関連する；⑥対人摩擦の満足度の関連は、恋人関係よりも異性友人関係において顕在化しやすい；ことなどが見いだされた。これらは、競争性や攻撃性に関する性差や、対人関係の親密化過程に伴うネガティビティの高まりなど、さまざまな先行研究の知見と基本的に合致するものであり、本論文で構成された下位尺度の妥当性の論拠ともなりうると思われる。また、なかでも興味深いのが、上記④「同性友人関係における

関係性評価と対人ストレスの関連パターンの性差」である。すなわち、男性では対立や気遣いは関係性評価にあまり関連せず、相手に迷惑をかけてしまう（そしてそれが許容される）ような関係ほど、肯定的に評価されるようである。それに対して女性では、相手に迷惑をかけることはあまり関係性評価に関連せず、対立や気遣いが多いほど否定的に評価されるようである。これらの傾向は、「男性は細かいことを気にせずに、他者に頼らず自立すべき」「女性は多少依存的でもいいが、協調性が重要」といった、伝統的性役割観に合致する結果としても解釈可能かも知れない。そのことは、対人ストレスとジェンダーの関連もまた、ひとつの重要な研究テーマとなりうる可能性を示唆している。

### 対人ストレス尺度の基準関連妥当性

研究Ⅱと研究Ⅲでは、対人ストレス尺度の基準関連妥当性についても検討した。その結果、研究Ⅱにおける仮説2-1「全般的対人関係における対人ストレスとストレス反応は正の関連をもつ」；仮説2-2「全般的対人関係における対人ストレス、特に拒絶的な対人的相互作用の経験頻度は、孤独感と正の関連を有する。また、対人ストレス経験頻度と自尊心の間には、負の関連がある」という仮説は、いずれも基本的には支持された。しかしその一方で、研究Ⅲにおける仮説3-1「顕在的な対人ストレスの生起頻度は、社会的スキルと負の関連を示す」；仮説3-2「特定関係においても、対人ストレスとストレス反応の間には、基本的に正の関連がある」という2つの仮説については、ある種の関係においてしか実証されず、仮説の支持は部分的なものに留まった。

具体的には、まず仮説3-1について、たとえば対人過失と社会的スキルの相関においては、女性同性知人と異性友人のみ、有意な負の相関が示された。これらに負の相関があることは対人過失の構成概念から妥当な結果ではあるが、一方で、なぜ「女性が関与する友人関係」でのみ、そのような結果が見いだされたのかは疑問である。たとえば、男性より女性の方が対人感受性が高いので、スキル・対人過失ともに認識がよりの確である可能性や、恣意的な好意的関係である友人関係ほど、スキル不足による対人過失が問題として顕現化しやすい可能性など、さまざまな理由が考えられるが、その詳細は今後の検討課題であろう。また、仮説は特に設定しなかったが、対人摩擦と社会的スキルの関連についても、本研究ではそこに明確な関連は示されなかった。対人摩擦が「顕在的な対人トラブルの予期的回避事態」であるならば、それはスキルの

保有によって経験可能な事態なので、その意味でこの結果は対人摩擦の構成概念妥当性に疑問を投げかけるものとも考えられる。しかし、スキルの欠如によって、対人トラブルの前段階にまで至ってしまうという可能性も考えられる。おそらく、対人摩擦と社会的スキルの関連は一概には言えるものでないであろう。

また、仮説3-2についても、社会的スキルと同じく「女性が関与する友人関係」でのみ、対人過失とストレス反応の関連が見いだされたっており、その背景には先述したような、女性の友人関係の独自性があるのかもしれない。そして興味深いのは、男性同性知人、恋人、母親、そしてバイト先の苦手知人との関係においては、対人ストレスが社会的スキル・ストレス反応いずれとも基本的に関連を示さなかったことである。すなわち、これらの関係における対人ストレスは、個人が有する社会的スキルにも左右されず、ストレス反応にも影響しないと考えられる。その理由としては、これらの関係がいずれも、対人関係のトラブルをある程度前提としており、かつ容認される傾向が強いものであるという可能性が考えられよう。恋人や家族の関与度の高さ、男性の競争的傾向、そしてバイトでの課題達成的志向性はいずれも、対人関係上の軋轢が生じることの促進要因となりうると思われる。そしてそのことは同時に、これらの関係では「対人ストレスのある程度の生起はやむを得ない」ことが前提化されており、多少の対人ストレスを気にするようであれば、これらの関係は成立・維持し得ないという可能性を示唆している、とも考えられるかも知れない。そのように考えれば、女性の同性友人関係、異性友人関係、そして学内の苦手知人関係は、そのようなタフさが要求されるものではなく、対人ストレスに敏感で、脆弱性の高い関係なのかも知れない。

## 今後の課題

全般的に、本研究で見いだされた結果は、いずれも対人ストレス各下位尺度の構成概念に合致するものであり、本尺度は現時点では、信頼性・妥当性を有していると考えられる。しかし今後もさらに、信頼性・妥当性の検討を重ねることが必要であることは言うまでもない。たとえば、本論文の知見は、いずれも大学生を中心とした青年層のデータによるものであり、これらの知見が他の世代・年代にも適用可能であるかについては、さらに検討が必要である。

また、それと連動して、どのような要因がこれら対人ストレスの生起を規定し、そして対人ストレスの生起が何をもたらすのかについて、個人要



因と状況要因の両面からの検討も望まれよう。なかでも、対人摩耗が「気配り」「気遣い」に由来する対人ストレスである可能性を考えると、本尺度の下位尺度構成が通文化的なものであるか否か、すなわち文化的要因を含めた検討も必要であろう。

そして最後に、社会的スキル・トレーニングの効果測定指標としての本尺度の使用可能性についても言及しておきたい。社会的スキルの効果測定においては、一般的に、社会的スキルに関する指標と、不適応症状に関する指標の関連について検討することが多い。しかし、先述した社会的スキルの本来的定義を考えると、おそらくそこには、「現実の対人的相互作用」という媒介要因が想定されて然るべきであろう。にもかかわらず、それが想定されないことが多いのは、それを測定するための適切な指標の欠如に依るところもあるのではないだろうか。その意味で、たとえば本尺度をスキル・トレーニングのプレ・ポストにおいて実施することによって、スキル・トレーニングが実際に対人関係の問題を低減しうるのかを検討する、などのアプローチは十分に考えられよう。本論文で開発された尺度は対人ストレスを測定するものであり、それは一連のストレス・プロセスにおいては独立変数として想定されるものである。しかし、このように対人ストレスを従属変数として想定するアプローチも含め、対人ストレス研究には、多くの課題と可能性があると思われる。

## 引用文献

- Abbey, E., Abramis, D.J., & Caplan, R.D. 1985 Effects of different sources of social support and social conflict on emotional well-being. *Basic and Applied Social Psychology*, 6, 111-129.
- 相川 充 2000 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学— サイエンス社
- Barrera, M. 1986 Distinctions between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, 14, 413-445.
- Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R.C., & Schilling, E.A. 1989 Effects of daily stress on negative mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 808-818.
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Cohen, S. 1988 Psychosocial models of the role of social support in the

- etiology of physical disease. *Health Psychology*, 7, 269-297.
- Cohen, S. & Wills, T.A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Coyne, J.C. & DeLongis, A. 1986 Going beyond social support: The role of social relationships in adaptation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 54, 454-460.
- Dohrenwend, B.S., Krasnoff, L., Askenasy, A.R., & Dohrenwend, B.P. 1978 Exemplification of a method for scaling life events: The PERI life events scale. *Journal of Health and Social Behavior*, 19, 205-229.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究, 11, 134-144.
- 遠藤由美 1999 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 150-167.
- Fiore, J., Becker, J., & Coppel, D. B. 1983 Social network interactions: A buffer or a stress. *American Journal of Community Psychology*, 11, 423-439.
- 橋本 剛 1997a 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から— 実験社会心理学研究, 37, 50-64.
- 橋本 剛 1997b 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 橋本 剛 2003 対人ストレスの定義と種類—レビューと仮説生成的研究による再検討— 人文論集 (静岡大学人文学部), 54(1), 21-57.
- Holmes, T.H. & Rahe, R.H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- Hooley, J.M. & Hiller, J.B. 2001 Family relationships and major mental disorder: Risk factors and preventive strategies. In B.Sarason & S. Duck (Eds.), *Personal relationships: Implications for clinical and community psychology*. West Sussex, England: Wiley. pp. 61-87.
- Horwitz, A.V., Mclaughlin, J., & White, H.R. 1997 How the negative and positive aspects of partner relationships affect the mental health of young married people. *Journal of Health and Social Behavior*, 39, 124-136.
- House, J.S., Landis, K.R., & Umberson, D. 1988 Social relationships and health. *Science*, 241, 540-545.
- Kanner, A.D., Coyne, J.C., Schaefer, C., & Lazarus, R.S. 1981 Comparison

- of two modes of stress measurement: Daily hassles and uplifts versus major life events. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 1-39.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する－向社会的行動の心理とスキル－ 川島書店.
- Lahey, B., Tardiff, T.A., & Drew, J.B. 1994 Negative social interactions: Assessment and relations to social support, cognition, and psychological distress. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 13, 42-62.
- Lepore, S.J. 1992 Social conflict, social support, and psychological distress: Evidence of cross-domain buffering effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 857-867.
- Major, B., Zubek, J.M., Cooper, M.L., Cozzarelli, C., & Richards, C. 1997 Mixed messages: Implications of social conflict and social support within close relationships for adjustment to a stressful life event. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1349-1363.
- 諸井克英 1991 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学人文学部人文論集, 42, 23-51.
- Pierce, G.R., Sarason, I.G., & Sarason, B.R. 1991 General and relationship-based perceptions of social support: Are two constructs better than one? *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 1028-1039.
- Rook, K.S. 1984 The negative side of social interaction: Impact on psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1097-1108.
- Rook, K.S. 1992 Detrimental aspects of social relationships: Taking stock of an emerging literature. In H.O.F. Veiel & U. Baumann (Eds.), *The meaning and measurement of social support*. Bristol, PA: Hemisphere Publishing Corporation. pp. 157-169.
- Rook, K.S. & Pietromonaco, P. 1987 Close relationships: Ties that heal or ties that bind? *Advances in Personal Relationships*, 1, 1-35.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rotenberg, K.J. 1994 Loneliness and interpersonal trust. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 13, 152-173.
- Ruehlman, L.S. & Karoly, P. 1991 With a little flak from my friends:

- Development and preliminary validation of the Test of Negative Social Exchange (TENSE). *Psychological Assessment*, 3, 97-104.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA loneliness scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Sandler, I.N. & Barrera, M., Jr. 1984 Toward a multimethod approach to assessing the effects of social support. *American Journal of Community Psychology*, 12, 37-52.
- Sarason, I.G., Johnson, J.H., & Siegal, J.M. 1978 Assessing the impact of life changes: Development of the life experiences survey. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 46, 932-946.
- Schuster, T.L., Kessler, R.C., & Aseltine, R.H., Jr. 1990 Supportive interactions, negative interactions, and depressed mood. *American Journal of Community Psychology*, 18, 423-438.
- Segrin, C. 1998 Disrupted interpersonal relationships and mental health problems. In B.H. Spitzberg & W.R. Cupach (Eds.), *The dark side of close relationships*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 327-365.
- Segrin, C. 2001 *Interpersonal processes in psychological problems*. New York: The Guilford Press.
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二 1998 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4, 22-29.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.
- Vinokur, A.D. & van Ryn, M. 1993 Social support and undermining in close relationships: Their independent effects on the mental health of unemployed persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 350-359.
- Wheaton, B. 1996 The domains and boundaries of stress concepts. In H.B. Kaplan (Ed.), *Psychosocial stress*. San Diego, CA: Academic Press. pp. 29-70.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.